
所 報

1. 所員の移動についての報告

1989年4月から新たに英語教育担当の Peter B. MaCagg, William Schipper, John C. Maher 三準教授が教育研究所員に加わりました。

2. 研究所活動報告 (1988年9月－1989年8月)

1. 研究所創立35周年記念シンポジウム

「現代日本の高等教育—その現状と課題—」

1989年2月18日(土) ICU 本部棟206号室において

基調講演(1:30－2:30), 関 正夫氏。

話題提供(2:30－5:15), 生田孝至氏, 近藤邦夫氏, 立川 明氏,
上野田鶴子氏。

2. 研究員

研究員 (Research Associates)

- (1) 岩佐 玲子, 国際基督教大学博士課程, 住所: 東京都三鷹市, 研究題目: 英語読解力向上をめざす語彙学習用 CAI の開発のための基礎的研究, 研究期間: 1989年4月－1990年3月, 指導教授: 石本菅生
- (2) Robert Solodow, Ph.D., 本籍: 米国, 在住地: 東京都渋谷区, 専攻: 臨床心理学, 研究題目: ライフダイナミックスセミナー参加者の社会的態度, 信念変化の経年的効果に関する研究, 研究期間: 1989年4月26日－1990年4月25日, 指導教授: 星野 命
- (3) 塚本美恵子, コロンビア大 M.A. 住所: 埼玉県入間市, 研究題目: 児童生徒の新環境への適応について, 研究期間: 1989年4月－1990年3月, 指導教授: 星野 命

研究見習員 (Research Apprentice)

- (1) 原 和子, 元東洋英和女学院教諭, 住所: 東京都港区, 研究題目: 帰国子女教育問題, 研究期間: 1989年4月－1990年3月, 指導教授: 星野 命

3. 助手（新任）

非常勤助手（Part-time assistant）

- (1) 川津茂生，コーネル大 M.A. 住所：千葉県船橋市，期間：1989年5月－1990年3月

研究室活動報告（1988年9月－1989年8月）

教育哲学研究室

I. 人の動き

〈研究休暇〉ベンジャミン・C・デューク教授 1988年9月－89年3月

佐藤尚子副手は1989年3月に退任。目黒賢哉（1988年9月より）及び寺尾明人（1989年4月より）副手に就任。

II. 研究活動

〈共同研究〉

- 「日米四年制大学における単位制度の実態と将来像に関する比較調査研究」（平成元年度文部省科学研究費補助金交付一般研究C）研究代表者：讃岐和家教授
- 「アメリカ高等教育における能力観と制度変革とに関する史的研究」（平成元年度文部省科学研究費補助金交付総合研究A）研究代表者：立川明準教授

〈講演会〉

- 1988年9月20日 ：中畠邦日本女子大学教授，「近代日本における女子高等教育の成立」
- 1988年10月1日 ：ジョン・エッケンヘッド スコットランドサマーヒル，キルクハニティ・ハウス校校長「子どもと教員—愛と自由と創造と」

〈研究会・その他〉

- 1988年10月31日 ：大学院教育哲学研究室研究会（修士論文中間発表を中心に）
- 1988年12月5日 ：ICU 大学院教育哲学研究室紀要発刊のための委員会が開かれ讃岐和家教授が会長に，立川明準教授が編集責任者として選出された。
- 1989年2月3日 ：教育学科教育学専修生卒業論文・大学院教育哲学専修生修士

論文発表会

- 1989年2月20日 : 大学院教育哲学研究室研究会（修士論文中間発表を中心に）
 1989年4月9－10日 : 大学院教育哲学研究室春季研究合宿（修士論文中間発表を中心に，代々木国立青少年オリンピックセンターにて）
 1989年6月19日 : 大学院教育哲学研究室研究会（修士論文中間発表を中心に）
 1989年7月24－26日 : ICU 教育セミナー（八王子大学セミナーハウスにて。卒業生教員，学部生，院生，及び ICU 教員が参加）磯田一雄成城大学教授（元 ICU 助教授）の講演があった。

讃岐和家教授

研究活動

1. 「現代日本における大学教育改革の方策」について研究を行った。
2. 文部省科学研究助成金による一般研究「日米四年制大学における単位制度の実態と将来像に関する比較調査研究」に研究代表者として参加し，研究を行った。
3. 本学の原一雄教授を研究代表者とする文部省科学研究助成金による「ファカルティ・ディヴェロップメントに関する研究」に研究分担者として参加した。
4. 日本教育学会会長の大田堯教授を研究代表者とする文部省科学研究助成金による特別研究「教育学用語標準化の調査研究」に研究分担者として参加した。

学会発表・参加

1. 1988年9月9日～10日に行われた日本デューイ学会大会（於・福岡工業大学）において，個人研究発表の部の司会者をつとめた。
2. 1988年10月15～16日に行われた教育哲学会大会（於・慶応大学）において，課題研究シンポジウム「教育哲学は教育改革にどうアプローチするか——臨教審答申の原理的考察と検討——」の司会を田浦武雄教授とともにつとめた。
3. 1988年11月5日，筑波大学で行われた「大学教育セミナー」において「大学における教育機能の活性化の方策」について講演を行った（全文は89年度中に同大学・大教センターの紀要に掲載される）。
4. 1988年11月26～27日に行われた一般教育学会の課題研究集会（於・東海大学校友会館）において，第1セッション「Undergraduate 教育」の司会を高野義郎教授とつとめた。
5. 1989年2月18日，ICU 教育研究所創立35周年記念シンポジウム「現代日本の高等教育——その現状と課題——」において，第1部 基調講演，および第2部 パネル討議の司会者をつとめた。
6. 1989年2月21日，在日・外国企業人事担当者懇話会（於・アメリカンクラブ）において，“The Recent Trend of Student's Attitude toward Placement”と題する

スピーチを行った。

7. 1989年3月9～11日, 広島大学大学教育センターで行われた高等教育研究会において「単位制の空洞化を克服する方策——学生の学習の質的改善に向けて——」と題する公開講演を行った(全文は, 89年秋刊行予定の広島大学・大学教育研究センターの紀要に掲載される)。
8. 1989年5月20日に行われた日本キリスト教教育学会大会(於・東京女子大学)で, 研究発表の司会を大曾根良衛教授とつとめた。

その他

1. 一般教育学会, 学会事務局長, 常任理事, 学会誌常任編集委員
2. 日本キリスト教教育学会, 常任理事
3. 日本学術会議・教育学研究連絡委員会・委員
4. 文部省・一般教育視学委員会・委員
5. 三鷹市・教育委員
6. 民主教育協会・「学生生活セミナー」の全国セミナー企画委員会・委員および「関東甲信越地区セミナー」実行委員会委員

川瀬謙一郎教授

1. 研究課題

宗教社会学における人格形成の研究

ベンジャミン・C・デューク教授

研究活動 (research activities)

The 21st Century Leaders of Japan, America and Britain : A Comparison of the Attitudes of 3000 Students in Outstanding Secondary Schools ; carried out in Britain, America and Japan during the sabbatical year.

Language Policy in the Third world : A visit to Kashmir, India, for a study of the language policy of schools.

論文・著作 (publications)

JAPANESE SCHOOLING : PATTERNS OF SOCIALIZATION, EQUALITY AND POLITICS, edited by James Shields, Pennsylvania State University, 1989 ; Chapter 20 : Variations on Democratic Education : Divergent Patterns in Japan and America.

立川 明準教授

研究活動

1987年に ICU で開催された Pacific Region Association for Higher Education に参加して以来、高等教育レベルでの国際交流に伴う諸問題を考察している。

平成元年度・2年度にわたり、文部省科学研究費補助金総合研究（A）を受けた。課題は「アメリカ高等教育における能力観と制度改革とに関する史的研究」で、研究分担者は立川（代表者）を含めて10名。8月の30日・31日に、東京ガーデンパレスに於いて、第1回の全体研究会を開催した。

学会発表・参加

- (1) 教育史学会（於・和洋女子大学）10月1・2日に参加した。
- (2) Pacific Region Association for Higher Education 年次大会（於・UC—San Diego）8月16～18日に参加して、Will One Have to be Educated Nationally First in order to be Trained Internationally? と題する発表を行なった。
- (3) 日本教育学会（於・筑波大学）8月28～30日に参加した。

論文・著作

- (1) “Engineering and Christianity in Higher Education : Past and Future.” *Proceedings of the Assoc. of Christian Univs. and Colleges in Asia, Tokyo Meeting, 1988* pp.135—152.
- (2) “Problems and Prospects in International Cooperation.” *Proceedings of the Pacific Region Association for Higher Education, Seoul Meeting, 1989*, pp.86—91.
- (3) 「私のアメリカ大学史研究と図書館体験」
『国際基督教大学図書館公開講演集』第4集, 1989, pp.7—31.

その他

- (1) 日本教育学会『教育学研究』 英文校閲係
- (2) 同 編集委員
- (3) Pacific Region Association for Higher Education, Executive Committee Member

林 昭道助教授

研究活動

1. 近代ヨーロッパ教育思想史（ドイツ中心）
2. ゲーテ、シュプランガーの作品を中心にしてはばひろい角度から、教育に関わる諸概念の成立と変化の流れを追う。

心理学研究室

人の動き

1989. 3. 31 都留春夫教授, 定年退職される。
1989. 4. 1 栗山容子助教授, 準教授に昇格。入試研究主任に就任。
原 一雄教授, 一般教育プログラム主任に再任。
道又 爾, 福田憲明, 小沢 (乙竹) 佐和, 巖岩秀章, 辻あづさ,
非常勤副手に就任。
1989. 6. 1 星野 命教授, 日本語教育研究センター準備室長に就任。

非常勤講師

- 1988 冬学期 鳥居修晃 (東京大学教養学部教授)
「EPS 352」知覚と認知の心理学」
高頭英明 (花クリニック医師)
「GEPS 580」教育心理学研究Ⅷ」
- 1989 春学期 平木典子 (立教大学学生相談所カウンセラー・教授)
「GEPS 461」ガイダンス・カウンセリング研究Ⅰ」

研究活動

- 星野 命 文部省科学研究費 (一般研究) 「全人的健康と生涯福祉に関する理論的実践的研究」(研究代表者)
- 原 一雄 文部省科学研究費 (一般研究B) 「大学教員のための教授資質開発 (FD) プログラムの策定と実践的試行」(研究代表者)
- 栗山容子 「ICU における教育実習生の評価の諸問題」立川明準教授と共同研究
「Prisoner-Dilemma Game による異文化間の社会的相互作用の分析」Prof. Rackham. D. と共同研究
- RACKHAM, David with Y.Kuriyama — Patterns of negotiation using a modified version of the Prisoner's Dilemma game in a cross-cultural context.
With E.C.P. Stewart (now at University of Glassgow) — Neural Darwinism and perceptual variations across cultures. (may also involve Japanese colleagues in near future — subject to negotiation).

心理学談話会・講演会

1988. 11. 10 Dr. Jean Kristeller 演題「バイオフィードバック療法について」

- 於 シーベリー小教会堂
 1989. 2. 14 都留春夫教授 大学礼拝（最終講義） メッセージ「ICU－わが
 まなびや」 於 大学教会堂

論文発表会

1988. 9. 13, 20, 27 卒論 中間発表会
 10. 28 大学院修論 集団指導
 1989. 1. 20 修論 発表会 発表者 5名（6月卒業1名を含む）
 2. 9 卒論 発表会 発表者 22名（6月卒業1名を含む）
 5. 27 修論 計画発表会
 5. 30, 6. 6, 16 卒論 計画発表会
 6. 14 心理学研究法 期末発表会

セミナー

1989. 6. 27, 28 心理学研究室教員退修会（主題：心理学カリキュラムの改訂）
 於 八王子大学セミナーハウス
 参加者 教員6名
 7. 6～9 心理学サマー・セミナー（主題：心理学のこれから）
 於 八王子大学セミナーハウス
 参加者 教員6名，院生・学部生78名，その他1名，計85名
 （実行委員長 岡林秀樹， アドバイザー 星野 命）

その他

1988. 12. 9 心理学研究室クリスマス・パーティー 於 Dr. Rackham 邸
 1989. 2. 9 卒論発表慰労会 於 Dr. Rackham 邸
 2. 22 都留春夫教授に感謝する会 於 ICU 食堂
 3. 3 非常勤講師慰労会 於 （三鷹）ランブロワージ

修士論文

1989年3月卒業者

- 北村 美香 対人情報処理における概念の想起しやすさの効果——質問紙への大
 学生の回答分析——
 井上 直子 人格の治療的变化過程の一理論
 美濃口 聡 対人恐怖についての一研究——セルフ・モニタリング概念を用いて
 大井 直子 人生観に関する心理学的一研究——Kilbyの価値尺度改訂版への試
 み

1989年6月卒業者

川戸さえ子 Beck Depression Inventory 日本語改訂版の妥当性の研究

原 一雄教授

I. 研究活動

1. 神経心理学的研究：カフェインの学習に及ぼす精神薬理的効果
2. 教育心理学的研究：大学生の価値観と教育環境の評価
3. 高等教育に関する研究：
 - a) 大学教員の教授資質開発（FD）プログラムの実践的試行
 - b) 一般教育のカリキュラム開発

II. 学会発表等

1. 「大学キャンパスの認知図式化の試み（1）教育環境の意味次元について」
日本心理学会第62回大会（於広島大学 1988. 10. 10 兼座長） 大会論文集
p.400
2. 「大学構成員による教育プログラムの評価」 一般教育学会1988年度課題研究
集会（於東海大学校友会館, 1988. 11. 26） 課題研究集会要旨集 43-46
3. 「Faculty Development 活動の現状と課題」 広島大学大学教育研究センター・
公開シンポジウム（於広島大学大学教育研究センター, 1989. 3. 10）
4. 「国際基督教大学における大学教育研究体制の構想」 一般教育学会第11回大
会シンポジウムⅠ〈各大学教育研究機関〉の在り方〉（於香川大学, 1989. 6.
4）発表要旨集録 60-63
5. 「生理心理学のカリキュラムと教授・学習の方法について」 日本生理心理学
第7回学術大会 談叢〈生理心理学・精神生理学のカリキュラムと資格認定につ
いて〉（於北海道大学, 1989. 7. 11 兼オーガナイザー・提案者） 予稿集 1
9-20

III. 著 作

1. 「FD（ファカルティー・デベロプメント）とSD（スタッフ・デベロプメン
ト）」『学校法人』 Vol.11(No.7), 1988.9, 2-6.
2. 「高次脳機能の生理学：動物実験」 鈴木寿夫・酒田英夫（編）『新生理科学大
系 12』医学書院 1988.10, 247-257.
3. 『国際基督教大学における一般教育プログラムの変遷 I. カリキュラム編
（FD プログラム研究レポート No.1）』 国際基督教大学 1988.11, pp.106.
4. 「ICU 在学経験の評価——1986年度追跡研究——」『教育研究 国際基督教大学
学報Ⅰ-A』 31, 1989.2, 51-78.

5. 「日米学生サービス（含対策）比較」『IDE — 現代の高等教育』 No.305, 民主教育協会 1989.7-8, 49-55.

IV. その他

1. (随筆)「心理学研究室の先達者たち」『教育研究 国際基督教大学 学報 I - A』 31, 1989.2, 277-285.
2. (講演)「FD について」 関東地区工業大学工学部長会議 (於蔵前工業会館 1989. 1. 31)
3. (礼拝メッセージ: ジュニャー・サーモン)「お花とお話しましょう」(於国際基督教大学教会堂) 1989. 6. 18
4. (インタビュー)「大学教員の資質向上へ: 授業評価の定着を」『週間教育 PRO』 No.23, 1989.6.20, 34-36.
5. (研究助成金) 文部省科学研究費 (一般研究 B)「大学教員のための教授資質開発 (FD) プログラムの策定と実践的試行」(研究代表者)
6. 学会役職
 - (1) 日本心理学会, 『心理学研究』, 『Japanese Psychological Research』誌編集委員
 - (2) 日本生理心理学会, 常任運営委員, 『生理心理学と精神生理学』誌編集副委員長, 英文アブストラクト委員
 - (3) 日本基礎心理学会, 運営委員, 『基礎心理学研究』誌常任編集委員
 - (4) 日本教育心理学会, 『教育心理学研究』誌編集委員 (1989. 3 迄)
 - (5) 一般教育学会, 評議員, 常任編集委員, 学会事務局幹事
 - (6) 広島大学教育研究センター客員研究員
 - (7) 『J. of Neurolinguistics』誌 Associate Editor

星野 命教授

I. 研究活動

1. 前年度 (1987.4-'88.3) に引き続き, 文部省科学研究費補助金 (総合 B) による「全人的健康と生涯福祉に関する理論的実践的研究」の代表研究者として, 分担研究者 (兵庫教育大, 日本女子大, 追手門学院大, 秋田大, 防衛医大などの計 6 名) と通算 5 回の研究会と, 1 回の学会発表 (日本人間性心理学会第 7 回大会) を行なった。単なる精神保健を超える全人的健康とウェルネスの概念と特性を理論的に, また女子大生や高齢者の健康観の調査結果を分析・考察した。
2. 京都大学教育学部小林哲也教授を代表者とし, 松下文化財団からの研究補助金を得て行われる「アメリカ大学院への留学効果の評価に関する調査研究」に参加し, 他大学 (関東学院大, 桜の聖母短大) や研究所 (国立教育研) などの研究者とともに

に、1989年9月実施を目標に調査項目・調査用紙の作製・決定にたずさわった。

(なお、この研究は西独で行われる同様の調査研究とタイ・アップし、結果は米国の I.I.E. (Institute of International Education) と日米教育委員会 (フルブライト委員会) に報告され公表される予定)

Ⅱ. 学会発表・参加

1. 日本人間性心理学会第7回大会 ('89.9.2-4, 於明治学院大学横浜校舎) に参加し、自主企画シンポジウム (上記1) において発表・司会を行なった。
2. 日本電話相談研究会第1回研究集会パネル・ディスカッション「今、なぜ電話相談なのか」に参加し、話題提供者の一人として「電話相談にみる三つの切口」を発表した。(1988. 9. 3, 於横浜保土ヶ谷公会堂) [内容要旨は「電話相談学研究」Vol.1, 11-12 頁]
3. 国立民族学博物館主催特別研究「現代日本文化における伝統と変容」シンポジウムⅧ「日本人にとっての外国」(1988年12月21-23日) に参加し、第2日の午前10:00から1時間にわたって「子供の異文化接触」について研究発表を行なったのち、質疑・討論に応じた。
4. 日本精神衛生会主催・世界精神保健連盟西太平洋地区共催 International Forum on Mental Health ('88.10.1, 於東京大手町サンケイ会館) の企画運営と当日の司会者の一人をつとめた。
5. 東京学芸大学海外子女教育センター主催「海外子女教育に関するキーワード・シソーラス作製研究会」('89, 於竹橋会館) に出席し、「異文化間心理学に関する研究の動向と参考文献」について発表した。
6. 異文化間教育学会第10回大会 '89.5.13-14, 於京都外国語大学) に参加し、自由研究発表Ⅳの司会をつとめた。
7. 東海心理学会第38回大会 ('89.5.28, 於愛知淑徳短期大学) においてシンポジウム「異文化間コミュニケーション」の話題提供者の一人として「異文化間心理学の立場から」発表した。
8. 広島大学大学教育研究センターの客員研究員を依頼され、広島大学・文部省主催、OECD の協力による国際セミナー「留学生と高等教育の国際化」にオブザーバーとして出席し、また機会を得て発言した。('88年11月8-9日, 於広島シティホテル)
9. 国立日本文化研究センターの共同研究プロジェクト「日本型モデルのメリットとデメリット」(代表: 濱口恵俊) のメンバーとなり、第2回と第3回の研究会に出席し、後者では、「心理学におけるモデル論の功罪」と題して、口頭発表を行なった。

Ⅲ. 著 作

1. 「海外成長日本人の文化的ポテンシャル」『社会心理学研究』第3巻第2号, 1988年, 30-38頁
2. 「国際化という視点から見た日本の教育の課題: 「文化摩擦」「文化ショック」の理解」, 『教職研修総合特集』No.48, 国際化教育読本, 教育開発研究所, 1989, 88-90
3. 「心をきたえるということ——健康な心づくり——」, 『児童心理』金子書房, 1989年5月号, 1-11
4. 「異文化としての子ども」, 『教育心理 別冊②』, 日本文化科学社; 1989, 136-139
5. 「日本人と対人関係」, 安藤延男編, 『人間関係入門』ナカニシヤ出版; 1988, 203
6. 「序 家族への学際的アプローチ」, 星野 命編『講座 家族心理学 ①, 変貌する家族——その現実と未来』, 金子書房; 1989. 1-12頁
7. 「家族と文化」, 杉溪一寿編『講座 家族心理学 ④, 家族と社会』, 金子書房; 1989, 143-162頁
8. (書評) 野村 昭著『社会と文化の心理学』(1987)『社会心理学研究』4巻1号, 1989. 64-65頁

Ⅳ. 講演等

1988. 9. 7. 文部省主催 海外子女教育 講習会
講演「帰国子女の文化適応について」於筑波国立教育会館
- 同 9. 22. 東京都中野第一中学 PTA 例会にて「見直そう, 日本の教育」
- 同 10. 4. 市ヶ谷ルーテルセンターにおいて東京ルーテル神学大学「人間の成長とカウンセリング研究所」主催のカウンセリング・ワークショップにて講演「性格は変えられるか」
- 1989年 4. 3. ICU 入学記念講演を行なった。「異文化との出会い, かかわり, その結果」
4. 15. 多摩いのちの電話第六期開講講演「いのちの四季をどう生きるか」を行なった。
6. 12-14に青山学院大学で行われた「国際文化交流シンポジウム」(組織委員長: 杉山 寧 青山学院大教授)に参加し, 第4セッションにおけるスピーカーの一人として「異文化間教育の視点から見た国際文化交流の課題」と題して発表した。
8. 4. 総合健康増進財団(理事長: 本明寛早稲田大学名誉教授)の夏季カウンセリングセミナーにおいて「帰国子女の教育とカウンセリング」について講演。

V. その他

1. ICU 教養学部教育学科長（任期1990年3月まで）
2. ICU 教育研究所長（任期同上）
3. 日本人間性心理学会運営委員（ニュース・レター担当，1989年3月まで）
同監事（1989年4月－現在）
4. 国際応用心理学会第22回会議プログラム委員（'88年9月9日以降数次の委員会に出席）
5. 日本社会心理学会常任理事（渉外担当，のち学会活動担当）
6. 「文化と人間」の会代表（1989年10月より顧問）'88年10月2日，同12月24日，'89年4月22日，7月16日の研究会に参加した。
7. Tokyo Community Counseling Center（在日外国人のための相談所）の
Advisory Committee Member.
8. 異文化間教育学会理事（学会誌編集担当）
9. 日本精神衛生会運営委員 兼 会誌「心と社会」編集委員
10. 佐藤玩具文化財団第3回（昭和64年度）奨励金交付・論文コンテスト審査委員
11. ICU 日本語教育研究センター（仮称）設置に関する諮問委員会委員
12. 私立大学連盟教育研究問題検討部会留学生問題等分科会委員（1988年11月22日，
12月13日，1989年1月31日，3月23日，4月27日，5月10日，6月1日の会合に出
席）
13. 東京国際大学大学院社会学研究科「異文化間社会心理学」に出講（通年）
14. 青山学院大学大学院教育学研究科「臨床心理学演習」に出講（半年）
15. 東京多摩いのちの電話運営委員（副委員長）兼 研修委員
16. 日本精神衛生学会運営委員 兼 編集委員（会誌特集担当）
17. 日本臨床心理士認定教会評議員（日本精神衛生学会選出の）
18. 朝日カルチャーセンター新宿の日本語教師養成講座「日本語と日本文化」に出講
（'89年4月6日－6月29日，毎週1回全12回）
19. 北陸学院理事・評議員（'89年5月～）
20. 北陸学院短期大学保育科に出講し，「精神衛生」の集中講義を行なった。（'89年7
月19－22日）

栗山容子準教授

I. 研究活動

1. 2－4歳児の象徴遊びに関する研究：みたて遊びからごっこ遊びへの展開とイン
タラクションにみられるみたての特徴分析
2. Prisoner-Dilemma Game による異文化間の社会的相互作用の分析：集団の決定
方略の検討

3. 教育実習生の評価の問題：教授スキルの評価尺度の作成

Ⅱ. 学会発表等

1. 「比喻文の検討——わかりやすさ，面白さと先行文を手がかりとして——」
日本心理学会第52回大会 1988. 10. 8－10 於広島大学
2. 「概念的カテゴリと比喻理解」 日本教育心理学会第30回総会
1988. 10. 24－26 於鳴門教育大学：徳島
3. 「教育実習生の評価の問題」 全国私立大学教職課程研究連絡協議会研究集会
1989. 5. 26－27 於広島修道大学
4. “Symbolic play in dyads of two to four year old children in relation to the effects of structure of play objects” Tenth Biennial Meetings of International Society for the Study of Behavioural Development. 1989.7.9－13 Jyväskylä, Finland.
5. 「2－4歳児の2人場面における象徴遊びの発達 (1)目的・方法・遊具の構造の違いにおけるみたて遊びの発達」
「2－4歳児の2人場面における象徴遊びの発達 (2)みたて遊びの内容的特徴」
「2－4歳児の2人場面における象徴遊びの発達 (3)主体のみたて」
日本教育心理学会第31回総会 1989. 7. 26－28 於北海道大学：札幌
(星三和子 蓮見元子と共同研究)

Ⅲ. 著 作

1. 「物を扱う遊びにおける象徴機能の発達水準」 教育心理学研究 第36巻第4号
1988. p.345－351 (星三和子 蓮見元子 日笠摩子と共同執筆)
2. 「ICU に於ける教育実習の評価の諸問題——教授スキルに関する教育実習生の自己評価と指導教諭の評価——」 国際基督教大学学報Ⅰ－A 教育研究 31, 1989, p.79－96

Ⅳ. その他

1. 「“遊びの科学”を考える——遊び研究の課題と方法論を巡って——」 日本教育心理学会第31回総会 自主シンポジウムパネリスト 1989. 7. 26－28

小谷英文助教授

研究活動

(1) 難治事例に関する心理療法の技法研究

- a) 個人精神療法 b) 集団精神療法 c) コンバインド・セラピー

(2) 力動的立場からの心理臨床家訓練の実践的研究

a) 体系的訓練法の組み立て

- i) 応答構成 ii) シナリオロールプレイ iii) プロセスグループ
- iv) 体験グループ v) グループ・ロールプレイ

b) スーパービジョン

- i) 力動的個人精神療法 ii) 力動的集団精神療法
- iii) エンカウンター・グループ

(3) 心理臨床学的知見の教育現場への応用

- a) 学校教育への応用 b) 看護教育・訓練への応用

学会発表・参加

(1) 日本心理学会第52回大会（於広島大学 1989, 10, 8-10）

口頭発表：井上直子（発表）・小谷英文「集団精神療法訓練法としてのプロセスグループの可能性（Ⅱ）」

学会シンポジウム グループ・アプローチの課題
ディスカッサント

(2) 第22回全国学生相談研究会議（於東北大学 1989, 1, 11-13）

シンポジウム 学生相談におけるグループ・アプローチ

シンポジスト：コンバインドセラピーの意義と技法の基礎

(3) 日本集団精神療法学会第6回大会（北九州市 1989. 2. 4-5）

口頭発表：小谷英文（発表）・井上直子「集団精神療法訓練法としてのプロセスグループの可能性（Ⅲ）」

論文・著作

著 書（共著）

田中富七夫編著 臨床心理学概説 1988年11月30日 北樹出版（第13章 集団療法 pp.165-175 担当）

論 文

小谷英文 井上直子 集団精神療法訓練法としてのプロセスグループの可能性（Ⅰ） 集団精神療法 第5巻1号 1989年1月 pp.63-67

報 告

小谷英文 コンバインドセラピーの意義と技法の基礎
学生相談シンポジウム報告書 東北大学 1989

その他

(1) 講演

- 1) 「力動的集団精神療法の基礎」
第6回 金沢・新潟合同臨床心理研究会 (於直江津 1988. 9. 4)
- 2) 「心の不思議(Ⅰ), (Ⅱ)」
三鷹国際市民大学 (於国際基督教大学 1988. 9. 17, 24)
- 3) 「老いのライフサイクル」 (於 慶応病院 1988. 10. 4)
「死と再生」(於 慶応病院 1988. 10. 13)
63年度紅梅会研修会
- 4) 「面接を通じての人格理解(Ⅰ), (Ⅱ)」
(於 家庭裁判所調査官研修所 1988. 10. 11, 12)
- 5) 「集団精神療法における個人とグループ」
(於 立教大学キリスト教教育研究所 1988. 12. 10)
- 6) 「カウンセリングにおける応答構成」
岩手ヒューマングロース研究会 (於 盛岡 1988. 12. 17)

(2) 臨床指導・ワークショップ

- 1) 教育相談事例検討指導 調布市教育研究所 (1988. 10. 18)
- 2) 「境界例のグループワーク」臨床指導 広島市精神衛生指導センター
(1988. 11. 26)
- 3) 養護教育事例指導 広島養護教諭精神衛生研究会 (1988. 11. 27)
- 4) 事例研究指導 家庭裁判所調査官研修所 (1988. 11. 30)
- 5) デイ・ケアプログラム臨床指導 杉並保健所 (1988. 12. 2)
- 6) 助言者 第20回家庭裁判所調査官カウンセリング研究会事例研究分科会 (於
東京 1989. 1. 15)
- 7) 事例研究指導 小倉家庭裁判所調査官研究会 (於 小倉 1989. 2. 4)
- 8) 養護教諭教育相談事例検討指導 調布市教育委員会 (1989. 2. 17)
- 9) エンカウンター・グループ実習オーガナイザー
広島カウンセリング・スクール (於 広島市 1989. 2. 25-26)
- 10) エンカウンター・グループ in 東京オーガナイザー
臨床的グループ・アプローチ研究会 (於 八王子 1989. 3. 17-19)
- 11) 事例研究指導 東京家庭裁判所カウンセリング室 (1989. 7. 14)
- 12) 平成元年度 エンカウンターグループ宿泊演習講座
プログラムオーガナイザー (1989. 8. 9-12)
- 13) グループ・アプローチ こみやじまプログラム
プログラム・オーガナイザー 臨床的グループ・アプローチ研究会

(於 宮島 1989. 8. 19-23)

14) PCA ウィークエンド夏合宿 実行委員

(於 川口湖 1989. 8. 26-30)

(3) 学会等の役職その他の学外活動

- 1) 日本心理臨床学会 カリキュラム検討委員
- 2) 日本集団精神療法学会 常任理事
学会誌編集委員, 研修委員, 渉外委員
- 3) 臨床的グループ・アプローチ研究会主事
- 4) PCA ウィークエンド運営委員

デービッド W. ラッカム助教授

Research Activities

D.W. Rackham with E.C.P. Stewart — Analyses of the relevance of Gerald M. Edelman's recent theory of "Neural Darwinism — The Theory of Neuronal Group Selection" to a material understanding of mind in general and perceptual and perceptual/congnitive variations across cultures in particular.

D.W. Rackham with Y. Kuriyama — Explorations of decision-making strategies in a cross-cultural context using modified version of the Prisoner's Dilemma Game.

D.W. Rackham — Pavlovian discriminative conditioning in the black bass, *Micropterus salmoides* and the three-spined stickleback, *Gasterosteus aculeatus*.

D.W. Rackham — The historical dimension in undergraduate studies in psychology.

Conference Attendances and Presentations

Japanese Psychological Association Annual Meeting, Hiroshima, Japan, October, 1988.

Neurolinguistics Conference, ICU, November, 1988.

IERS Symposium on Higher Education in Japan (35th anniversary of founding of IERS), February, 1988.

American Psychological Association (APA) Annual Convention in New

Orleans, Louisiana, U.S.A., August, 1989 — paper entitled “Neural Darwinism — Perceptual Variations Across Cultures” presented with E.C.P. Stewart under auspices of Division 24 — Theoretical and Philosophical Psychology.

Publications

Rackham, D.W. (1989). Classical conditioning — A Conceptual Revolution. *Educational Studies*, 31, 97–125.

Rackham, D.W. Discriminative courtship conditioning in the pigeon, *Columba livia*. Under revision.

Rackham, D.W. The historical dimension in undergraduate studies in psychology.” Under preparation for *Educational Studies*, Volume 32.

The following articles under preparation are based on ideas presented by E.C.P. Stewart and D.W. Rackham under the title “Neural Darwinism — Perceptual Variations Across Cultures” at the 1989 American Psychological Association Annual Convention held in New Orleans, Louisiana, U.S.A.

Rackham, D.W. and Stewart, E.C.P. “The implications of Neural Darwinism for an understanding of the material basis of mind.”

Rackham, D.W. and Stewart, E.C.P. “The viability of Neural Darwinism as a theory of brain function.”

Stewart, E.C.P. and Rackham, D.W. “Neural Darwinism and the problem of uniqueness, diversity and uniformity in perception and cognition.”

Stewart, E.C.P. and Rackham, D.W. “American cultural patterns — the role of perception.”

Other Activities

English language proof—reading services for Japanese Psychological Association publications and ICU colleagues.

Proctor for National Association of Securities Dealers Examinations (Psychological Corporation).

Leader, Keidanren International English Speaking Class, Marunouchi, Tokyo — discussions of topics in fields of education, economics, international business and

politics

Member, Board of Trustees, American School in Japan (ASIJ)

Subscription and circulation services on behalf of *The Japan Christian Quarterly*

Leader, weekly adult class, West Tokyo Union Church

Leader, special student study group on Japanese phraseology and phenomenology of emotional reactions (anger)

A variety of ongoing activities of an educational and service nature in connection with missionary associate status with the United Church of Canada and the United Church of Christ in Japan (Kyodan).

向井敦子講師

研究活動

- (1) 対人状況における認知判断と視点との関係の検討
- (2) 役割演技状況における事態に対する評価と原因帰属
- (3) 日本人の対人行動の規定因に関する考察

学会発表・参加

- (1) 1988年10月, 日本心理学会第52回大会において, 「当為判断の分化と統制因の位置 I. 尺度の構成と判断の一般的傾向 II. 場面による当為判断の分化」を発表 (同大会論文集 p.205-206) (深谷澄男との共同研究, 向井はII. を口頭発表)。同発表部門の座長をつとめた。
- (2) 1988年11月, 日本教育心理学会第30回総会に出席。
- (3) 1989年7月, 日本教育心理学会第31回総会において, 「集団討議場面に対する態度と原因帰属——役割演技及び事態に対する評価を手がかりにして——」を発表 (同総会論文集 p.273)。

論文・著作

- (1) 「A/B パターンの生成と心理学的実践工作」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 31, pp.127-171, 1989 (深谷澄男との共著)

視聴覚教育研究室

1. 人の動き

佐々木輝美，和田正人，田口三奈，駒井利江，斎藤由也，郭育適，ネグレリ・キャシー，高嶋真理子，待鳥敏子，森祐治が，1989年4月より副手に就任した。

また，以下の副手が辞任した。

来嶋洋美（88／3 辞任）は1989年3月，国際交流基金派遣専門家としてシンガポール言語研究所へ赴任。

田地庸子（88／6 辞任）は1989年4月，国際基督教大学の語学科（日本語プログラム）専任講師に就任。

浦田俊之（89／3 辞任）は1989年5月，国際協力事業団専門家としてトルコへ赴任。

田口三奈（89／6 辞任）は，ロータリー財団の奨学金を得てフロリダ州立大学大学院に留学。

ネグレリ・キャシー（89／6 辞任）は，1989年8月関西外国語大学国際交流課（日本語）専任講師に就任。

2. 研究活動

1) 第25回日本視聴覚教育学会・第33回日本放送教育学会連合大会

本研究室に事務局を置く日本視聴覚教育学会及び日本放送教育学会の連合大会が，上智大学を当番校とし，1988年9月26日（月），27日（火）の両日にわたり開催された。シンポジウム及び課題研究は次のようなテーマで行なわれ，中野教授，阿久津教授，石本教授および大学院生が参加した。

- シンポジウム：「国際化に対応する視聴覚教育」
- 課題研究Ⅰ：「テレビ番組とコンピュータソフトの組み合わせ利用」
- 課題研究Ⅱ：「視聴覚情報処理過程の諸問題」

2) 共同研究

田地庸子，平形裕紀子，来嶋洋美，駒井利江，高木裕子，高嶋真理子，岡部真理子，谷口聡人，横田淳子（東京外大），石本教授は，中野教授を代表とする昭和63年度放送文化基金による研究「放送番組を中心とした音声・文字・画像併用外国語学習パッケージの開発研究」に参加し，日本語学習のプログラム開発を行なっている。

岩佐玲子，田口三奈，斎藤由也は，中野教授を代表とする昭和63年度文部省委託研究「放送と他のメディアの最適組み合わせによる教材開発と効果の研究」に協力者として参加している。

佐々木輝美，和田正人は，阿久津教授と共に「テレビ番組別の，接触行動及び充足に関する研究」を行なっている。

岩佐玲子は，昭和63・平成元年度文部省科学研究費の補助による奨励研究(A)「英文読解力向上をめざす語彙学習用 CAI の開発のための基礎的研究」を行なっている。

浦田俊之と飯吉透は，日本視聴覚教育協会が受けた昭和63年度の文部省補助金による「ニューメディア教材の研究開発事業」に参加し，ハイパーメディア教材の開発を行なっている。

飯吉透，飛田ルミは，大内茂男教授（上越教育大学）を代表とする昭和63年度後期放送文化基金による「大学における放送・視聴覚教育の講座に関する調査・研究」に参加している。

鈴木美加，樋浦小静は平成元年度 ICU 夏期日本語講座のプレースメントテストの実施に協力し，テストの結果について分析し，「プレースメントテスト及び判定の評価に関する研究」を行なっている。

3) 修士論文発表会

博士前期課程修了者（1989年3月修了）による修士論文発表会を1989年3月9日に行なった。

発表者	題目
平形裕紀子	日本語教育のための CAI 語彙学習における音声付加の実証的研究

中野照海教授

I. 研究活動

1. 外国語教育における画像併用 CAI コースウェア開発のための基礎的研究（文部省科学研究費一般B研究代表）
2. 教育番組を中心としたマルチメディアの研究（文部省教育改革の推進に関する研究依託・放送教育協会，主査）
3. ニューメディア教材の研究開発事業（文部省教育改革の推進に関する研究依託。日本視聴覚教育協会，座長）
4. 教育番組を中心としたマルチメディア・パッケージの開発（放送文化基金研究助成代表）
5. 教育放送の技術移転の課題（放送文化基金助成）
6. 国際協力事業団・医療協力事業検討委員会「情報・教育・コミュニケーション」

のための指針の作成

7. トルコ厚生省コミュニケーション・センターの運営に関わる基礎調査—— KAP 調査を中心にして（国際協力事業団）

上記は研究助成などを得て行なわれたものであるが、その他に視聴覚教育の評価の問題、画像コミュニケーションの基礎的研究、授業のモデルの問題などの研究を継続中である。

Ⅱ. 学会発表等

1. 研究発表「外国語（英語）学習における音声と画像を併用したキーワードの利用」（浦田俊之と共同）第25回日本視聴覚教育学会・第33回日本放送教育学会合同大会（於上智大学，9月26日1988年）
2. シンポジウム司会「国際化に対応する視聴覚教育」上記合同大会（9月26日1988年）
3. パネリスト「パネル討論——21世紀をめざすこれからの教育」，教育工学関連学協会連合第2大会（於東京工業大学，8月11日1988年）
4. 研究発表「外国語学習における CAI コースウェア開発の基礎的研究——適性処遇相互作用の観点から——」（田口三奈と共同），教育工学関連学協会連合第2大会（於東京工業大学，8月11日1988年）
5. Paper, Integrating Educational Broadcasting with New Communication Technologies, at The 4th Symposium on Educational Broadcasting in Asia and Pacific Region, Singapore, March 21—23, 1989.
6. パネリスト「教育の方法と技術を考える」日本教育工学会（青山学院大学，5月3日1989年）

Ⅲ. 著 作

1. Educational Programs Today: From the 16th Japan Prize Contest, in The Proceedings of The 1988 Symposium on Educational Broadcasting in Asia and the Pacific Region, Sukhothai Thammathirat Open University, Thailand, 1988, pp.11—13.
2. 「視聴覚教育入門講座 6 画像研究の基礎——画像の抽象と具象の問題」『視聴覚教育』9月号1988年 pp.30—33.
3. 「視聴覚教育入門講座 7 画像研究の基礎——画像の働きを探る試み」『視聴覚教育』10月号1988年 pp.30—33.
4. 「視聴覚教育入門講座 8 映像リテラシーをめぐる問題——人は絵を読む学習が必要か」『視聴覚教育』11月号1988年 pp.30—33.

5. 「視聴覚教育入門講座9 コンピュータ・リテラシーをめぐって——コンピュータ・リテラシーを考える基礎」『視聴覚教育』12月号1988年 pp.30-33.
6. 「視聴覚教育入門講座10 コンピュータ・リテラシーの教育内容——情報処理教育の学校への導入」『視聴覚教育』1月号1989年 pp.32-35.
7. 「視聴覚教育入門講座11 ニューメディアの教育利用——ハードの進歩とソフトの開発」『視聴覚教育』2月号1989年 pp.30-33.
8. 「視聴覚教育入門講座12 視聴覚メディア開発の論理——行動科学的接近の方法」『視聴覚教育』3月号1989年 pp.30-33.
9. 「視聴覚教育入門講座13 視聴覚教育の研究の進め方1——研究の進め方の基本」『視聴覚教育』4月号1989年 pp.34-37.
10. 「視聴覚教育入門講座14 視聴覚教育の研究の進め方2——目的の設定と方法の展開」『視聴覚教育』5月号1989年 pp.30-33.
11. 「視聴覚教育入門講座15 視聴覚教育の理論と実際——研究と開発と実践との相互作用」『視聴覚教育』6月号1989年 pp.148-151.
12. 「500号記念特別論考 視聴覚教育の課題と展望——視聴覚メディアの理論と研究を中心に」『視聴覚教育500号記念特別号』6月1989年 pp.48-53.
13. 「教師のためのコンピュータ・リテラシー——コンピュータ社会におけるリンクの思想——人を中心にした機器との連結」『指導と評価』3月号1989年 pp.45-49.
14. 「中学校における情報化への対応」『教職研修』4月号1989年 pp.62-63.
15. 編著『放送と他のメディアの最適組み合わせによる教材開発と効果の研究』昭和63年度教育改革の推進に関する研究依託最終報告書, 「5. 今後の研究課題」pp.69-74 を執筆, 日本放送教育協会, 4月1989年
16. 編著『多メディア時代における放送教育の実践的研究』放送文化基金昭和63年度後期研究助成報告書, 10月1988年

〔エッセー〕

1. 「AVE レポート：情報化に対応する視聴覚教育——マイコン利用は視聴覚教育か」『視聴覚教育』9月1988年 pp.42-43.
2. 「AVE レポート：役に立つマニュアルの作成——あなたは読んで解りますか」『視聴覚教育』10月1988年 pp.40-41.
3. 「AVE レポート：資格社会と免許証——アメリカのメディア専門家の場合」『視聴覚教育』1月1989年 pp.42-43.
4. 「AVE レポート：あるラジオ放送——放送公開講座コンクールから」『視聴覚教育』3月1989年 pp.40-41.
5. 「AVE レポート：教員の現職教育——教員免許法の改定との連動」『視聴覚教育』

5月1989年 pp.48-49.

6. 「AVE レポート：束ねる思想——新たな生涯学習の方策」『視聴覚教育』6月1989年 pp.38-39.

7. 「AVE レポート：小さい技術と大きい技術——教育の方法と技術を考える」『視聴覚教育』7月1989年 pp.40-41.

IV. 講演等

1. 司会と討論「国際化の中の放送教育」国際シンポジウム，全国放送教育研究連盟大会（旭川市）10月6日1988年

2. パネリスト「これからの視聴覚教育」全国視聴覚教育連盟大会（神戸市）10月21日1988年

3. 講義「学校教育の情報化」文部省中堅教員研修講義（国立教育会館筑波分館）10月25日1988年

4. ラジオ放送「放送教育の新しい展開」（NHK 第2）10月30日1988年

5. 放送教育開発センター開設「10周年記念大学公開番組コンクール」審査委員会ラジオ部会長 2月20日1989年

6. ラジオ放送（民放連盟ネットワーク）「大学公開番組審査評」2月21日1989年

7. Symposium, Problems of Educational Broadcasting in Developing Countries, JICA Okinawa Center, February 27-28, 1989.

8. 講義「技術協力の課題——教育メディアと教育の仕組——」国際協力事業団・沖縄国際センター研究会，4月25日1989年

9. Lecture, Problems of Evaluation in Audiovisual Education, JICA Okinawa Center, April 25-26, 1989.

10. 講義「視聴覚教育の意義」文部省博物館学芸員講習会，6月23日1989年

11. Lecture, Research and Evaluation of Educational Media Programs, JICA Okinawa Center, July 17-18, 1989.

12. パネル討議「学校教育と視聴覚教育」文部省視聴覚教育指導者上級研修会（国立社会教育研修所）7月25日1989年

13. 講義「教育プログラム作成の課題」NHK 放送研修センター・日本理容美容センター指導者講習会（坂出市）8月5日1989年

V. その他

1. 日本視聴覚教育学会理事，学会誌『視聴覚教育研究』編集委員

2. 日本放送教育学会理事，学会誌『放送教育研究』編集委員長

3. 日本教育工学会理事，運営委員，広報委員，論文賞委員会委員，研究奨励賞委員会委員，研究奨励賞小委員会主査，学会誌『日本教育工学雑誌』常任編集委員，編

集幹事

4. 文部省社会教育審議会委員
5. 文部省教育メディア分科会長
6. 文部省社会通信教育分科会委員
7. 「視聴覚教育研修カリキュラム標準案作成」小委員会委員
8. 国立民族学博物館情報システム検討委員会委員
9. 国際協力事業団医療協力検討部会委員
10. NHK 学校放送中央諮問委員会委員
11. 全国放送教育研究会連盟研究推進委員会副委員長
12. 「視聴覚教育賞」(文部省・日本視聴覚教育協会) 選考委員
13. 日本映画機械工業会・日本工業標準(JIS) 新規原案作成委員会映写機等小委員会副委員長
14. 日本教育工学協会理事
15. 教育放送国際協力推進会議事務局長
16. 『教育マイコン実践』(日本科学技術協会) 編集委員

石本菅生教授

I 研究活動

1. 昭和63年度科研一般(B)「音声文字画像提示による外国語教育 CAI コースウェア開発に関する基礎的研究」(代表者: 中野照海) に研究分担者として参加。
2. 昭和63年度放送文化基金助成研究「放送番組を中心とした音声文字画像併用外国語学習パッケージの開発研究」(代表者: 中野照海) に参加
「テレビニュース」を学習素材とした日本語学習用音声映像併用 CAI システムの開発を分担。

II 学会発表(研究分担者として連名)

第33回日本放送教育学会・第25回日本視聴覚教育学会合同大会

「外国語としての日本語の語彙学習 CAI における音声付加についての実証的研究」 (合同大会発表論文集 p.9-10)

III 著 作

教師のためのコンピュータ・リテラシー

- 18 CAI 入門・その2——CAI 作成に係わる問題と選択利用——Vol 34, No.9, 1988
- 23 CAI 入門・その5——教材ソフト制作のための技能の修得はどう始めればよいか Vol 35, No.2, 1989

その他

日本視聴覚教育学会理事

日本放送教育学会理事

日本教育工学会編集委員

阿久津喜弘教授

研究活動

- (1) 青少年の「メディア利用」に関する研究
- (2) 教育の「国際化」および「情報化」に関する研究
- (3) 「映像」概念に関する研究

学会発表・参加

- (1) 日本社会心理学会第29回大会（1988年10月11日・12日，名古屋大学）に参加
- (2) 日本教育社会学会第40回大会（1988年10月14日－16日，名古屋大学）にて，「テレビ番組類型別の接触行動および充足に関する研究」（佐々木輝美・和田正人との共同研究）を発表
- (3) 日本新聞学会1989年度春季研究発表会（1989年5月27日・28日，松商学園短期大学）にて，ワークショップ「マスコミ理論の再検討」に参加

その他

- (1) 日本視聴覚教育学会理事，編集委員
- (2) 日本放送教育学会理事，編集委員
- (3) 日本教育社会学会評議員，選挙管理委員会委員長
- (4) 三鷹市社会教育委員

英語教育研究室

1. Within this last year, four new members have joined the Department : Professors Maher, McCagg, Schipper and Yoshioka.
2. There have been a series of on-going meetings dealing with the revision of course offerings to the end that the needs of students are better met, and, because of changes in personnel, substitution of courses which formerly dealt with Transformation Grammar.

小林栄智教授

I. 研究活動

1. 中英語期の John Gower の *Confessio Amantis* の中で語られている “Apollonius of Tyre” (1727行にわたる韻文による作品) と古英語の “Apollonius……” (散文) とを比較しながら読み・研究できるような資料を身近かなものになりたいと長い間検討してきた。ようやく古・中英語の「本文」, 註解, およびグロサリーを完成させるところまでできた。これを近い将来に出版できる見通しがついた。
2. *South English Legendary* の語彙, 意味変化の研究はかなり時間がかかりそうである。
3. 高等学校英語教科書作製の仕事は想像以上に時間とエネルギーを要するものだと痛感している。二年毎の部分的な改訂が必要とされる。また今回は『学習指導要領』が全面的に改訂された。この改訂にともなって教科書も改訂されなければならない。その作業はすでに開始されている。
4. 『講談社和英辞典』(共著) は1976年に刊行されて以来, 用例中心主義を貫くという特色により, 広く受け入れられ今日に至っている。この辞典も時代の要求に沿うように内容を再吟味し, 改訂・増補が必須になった。この作業は今年度から開始された。

II. 学会参加

1. 日本中世英語英文学会全国大会 (1988年11月2-3日, 同志社大学)
2. 日本英語学会全国大会 (1988年11月12-13日, 青山学院大学)
3. 日本英文学会——研究発表司会 (1989年5月20-21日, 青山学院大学)
4. 日本中世英語英文学会東支部研究発表会——司会 (1989年6月24日, 明治学院大学)
5. 全国英語教育学会盛岡研究大会 (1989年7月5-6日, 岩手大学)

III. 論文・著作

1. “GLOSSARY to the Middle English Version of *Apollonius of Tyre*,” 『教育研究31』(1989年2月), 199-218.
2. 「The Liberal Education (学芸教育) を考える—アラン・ブルームを読んで—」 『高等学校教育ノート・英語』(学図)(1989年5月), 1-8.
3. (執筆・編集・共) 『講談社パックス和英辞典』(1988年11月), 634頁.
4. (執筆・編集・共) 『講談社パックス英和・和英辞典』(1988年11月), 1272頁.
5. (共著) *Why English I*, (学図, 1989年, 改訂).
6. (共著) *Why English II*, (学図, 1989年, 改訂).

7. (共著) *Read English II B*, (学図, 1989年, 改訂).
8. (共著) *Write English II C*, (学図, 1989年, 改訂).

Ⅲ. その他

1. 日本英語学会・評議員, 1983～ .
2. 日本中世英語英文学会・評議員, 1987～ .

R. リンディ教授

1. A Study in Applied Phonetics :

- a) s and z in English : Frequency ; Morphophonemic Significance ; Distribution ; Stridency ; etc.
- b) Frequency and importance of making a distinction in the pronunciation of z and dz, as in "size — sides", "cars — cards".
- c) Frequency and importance of the pronunciation of the "s", "z" — "th" pronunciations across juncture, as in "six things", "makes them", "has thought", and "was the".
2. On-going revision, editing and writing of Ministry of Education; Approved text material for Middle School.
3. A Study on Classroom motivation for lower levels of English teaching.

F.C. パン教授

1. 研究活動

My research in 1988 has shifted mostly to neurolinguistics, general linguistics, and sign language. I can classify them into five areas : (1) textbook writing ; (2) conference organizing ; (3) keynote lectures ; (4) paper presentations ; and (5) research grants.

In the first area, I have added a textbook on neurolinguistics, to be edited by Dr. Ellen Perecman and Fred C.C. Peng, to the textbook series, which I hope will be published in 1990. Also added are *Introduction to Phonology : Analysis, Description, and Comparison* (edited by Toby Griffen and Fred C.C. Peng) and *Histories of Linguistics : An Introduction with Special Reference to the Origin and Development of Linguistics in Eastern Civilizations* (edited by Fred C.C. Peng and Robert H. Robins). They will appear in 1990 as part of the textbook series.

In the second area of activity, I organized the First International Conference of Neurolinguistics (November 28—30, 1988) and the Fifth Taichung Conference

of Neurolinguistics (December 1, 1988). There were 150 participants in the first and about 50 in the second. The Theme of the First International Conference of Neurolinguistics was : Senile Dementia in Modern Society : Problems and Care, with Emphasis on (i) Clinical Diagnosis, (ii) Medical Treatment, and (iii) Social Care. Three internationally well known scholars in the first were invited as keynote speakers : Dr. Martin Albert of Boston, U.S.A. ; Dr. Andrew Kertesz of London, Ontario, Canada ; and Dr. Guido Gainotti of Rome, Italy. The Conference was sponsored by the Neurological Society of R.O.C. (Taiwan) and the Neurolinguistic Association of Japan under the auspices of the Department of Health, The Executive Yuan, Republic of China. Prior to the First International of Neurolinguistics, I organized the 10th Annual Conference of the Neurolinguistic Association of Japan (Nov. 25–26, 1988) to commemorate the 10th Anniversary of the Association. In addition, I organized the 12th ICU Language Sciences Summer Institute (July 25–29, 1988) and the 14th Annual Conference of the Language Sciences Association of Japan (July 23–24, 1988). As the first attempt on an experimental basis I added the First Summer Institute on Language Pathology and Language and Speech Therapy, featuring four distinguished Japanese neuropsychologists. The results were excellent, as about 200 participants were enrolled for the language pathology and speech therapy summer institute.

Beside organizing conferences, I also attended two international conferences ; (i) International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research, II (May 18–21, 1988) and (ii) The First International Congress on Cerebral Dominances which was held in Munchen, BRD, from September 14 to 17, 1988.

In the third area, I was invited to give a keynote lecture, entitled "The Interface of Sociolinguistics and Neurolinguistics : Towards a Theory of Socio–Neurolinguistics" at the First Hong Kong Conference on Language and Society, which was held in April (25–28, 1988) with the theme of *Sociolinguistics Today : Eastern and Western Perspectives*. On October 30, 1988, I was also invited to give a keynote lecture to about 500 deaf people at 緑区聴覚障害者福祉協会, 横浜 「チンパンジーと手話」

Likewise, on March 28, 1989, I was one of the keynote speakers of the International Conference on Cross–Cultural Communication which was held in San Antonio, Texas. The title of my keynote lecture was "Language in Dementia : A Barrier in Communication" ; on my way back, I was invited to give a lecture to the students and faculty members of California State

University, Fullerton, on "The Interface of Sociolinguistics and Neurolinguistics : Towards a Theory of Socio—Neurolinguistics."

As part of the fourth area of activity I presented several papers in 1988—89 at various professional conferences. They will be listed individually below.

Finally, I should mention as the fifth area of activity that I have been awarded two research grants from the Department of Health, Taiwan. They are for the projects on neurolinguistics, the titles of which are : (1) Epilepsy and Language Disorders and (2) Parkinson's Disease and Language Degenerative Disorders. Each project to last for three years from July 1989.

II . 学会発表

- 1 . Purpose of the Conference, The First International Conference of Neurolinguistics, November 28, 1988.
- 2 . Some Observations on Progressive Supranuclear Palsy : From a Neurolinguistic Point of View, The First International Conference of Neurolinguistics, November 28, 1988.
- 3 . Language Deficiency in Patients with Lacunar State, The First International Conference of Neurolinguistics, November 29, 1988, with San—Yong Huang.
- 4 . Dementia in Pick's Disease, The First International Conference of Neurolinguistics, November 30, 1988, with San—Yong Huang.
- 5 . The Second International Conference of Neurolinguistics ; A Closing Remark, The International Conference of Neurolinguistics, November 30, 1988.
- 6 . Closing Remarks : The Future of Neurolinguistics in Taiwan, The Fifth Taichung Conference of Neurolinguistics, December 1, 1988.
- 7 . Problems in the Morphological Analysis of Sign Language, 15th LACUS Forum, Michigan State University, East Lansing, August 16—20.
- 8 . 「チンパンジーと手話」, 横浜市緑区聴覚障害者福祉協会, October 30, 1988.
- 9 . The Interface of Sociolinguistics and Neurolinguistics : Towards a Theory of Socio—Neurolinguistics, The First Hong Kong Conference on Language and Society, April 25—28, 1988. Also presented at California State University, Fullerton, as a lecture to the students and faculty, March 30, 1989.
- 10 . Language in Dementia : A Barrier in Communication, International Conference on Cross—Cultural Communication, San Antonio, Texas, March 28, 1989. Also presented on June 30, 1989 to the Physicians at the Taichung

Veterans General Hospital as an invited lecture.

Ⅲ. 著作と発表・論文

1988a *Language Sciences*, Vol.10, No.1 Editor, Oxford : Pergamon Press.

1988b *Journal of Neurolinguistics*, Vol.3, No.1 Editor, Oxford : Pergamon Press.

1988c *Language Sciences*, Vol.10, No.2 Editor, Oxford : Pergamon Press.

1988d *Journal of Neurolinguistics*, Vol.3, No.2 Editor, Oxford : Pergamon Press.

1988e *Language Research Bulletin*, Vol.3, No.1 Editor, The Division of Languages, I.C.U.

1988f 『行動としての言語』, Editor with Hidefumi Miyake, Makoto Sasaki, and Tetsuta Watanabe, Hiroshima : Bunka Hyoron Publishing Company.

1988g "Editorial Statement", *Language Sciences* 10.1.1-2

1988h 「神経言語学」(Neurolinguistics), *Brain and Nerve* 41.1.7-14.

ランドルフ H. スラッシャー教授

Major Professional Meetings Attended

March 8-11 Georgetown University Roundtable on Languages and Linguistics, Washington, D.C.

March 30-31 Tsukuba Testing Conference, Tsukuba

Paper Read

The End Product, the English Proficiency of Company Entrants at the Tsukuba Testing Conference March 30, 1989

Research Projects

- 1 . The comparison of the English proficiency of perspective employees (naiteisha) of two major trading companies and five banks from 1985 to the present. The Tsukuba Conference paper is a preliminary report of this work.
- 2 . The conversion of an English proficiency testing system from classical item analysis procedures to item response theory procedures.

P.B. マキャグ準教授

研究活動 (research activities)

Visited Davis, California and Cambridge, Bath, York and Ripon, UK to work on

establishment of new overseas English language programs for ICU students.

学会発表・参加 (conference presentations & attendances)

Attended Georgetown University Roundtable on languages and linguistics
March 1989.

その他 (others)

Acted as Resident Director for ICU's Study English Abroad Program at UC
Davis 7/15-9/5 1989.

W. スキッパー準教授

Conferences Attended :

- 1 . Japan Society for Medieval English Studies, Kyoto, Doshisha University,
December 1988

Publications :

- 1 . (editor) *Old English Studies from Japan*, Old English Newsletter, Subsidia 14
(Binghamton, N.Y. : Center for Medieval and Early Renaissance Studies, 1988)
- 2 . "English Annotations in CCCC MS 198", *In Geardagum* 10 (Boulder, Colo.,
1989) 1-17
- 3 . "Rabanus Maurus, *De rerum naturis* : A Provisional Checklist of Manuscripts", *Manuscripta* 31 (1989) ; in press.

Work in Progress :

- 1 . Rabanus Maurus, *De rerum naturis* : an encyclopedic compilation, assembled
between 842 and 847. I am preparing a critical edition of this text to be
published by Corpus Christianorum, Series Continuatio Medievals in Belgium.
- 2 . "Some manuscripts from St. Albans" : A study of five manuscripts containing
copies of Rabanus's encyclopedia, which, judging from the way they were
produced, came from St. Peter's Abbey, St. Albans.
- 3 . *The Anglo-Saxon Church and Superstitions* : A book-length study of the
pre-Conquest church's proscription of superstitious practices, in the context of
such prohibitions from the first century to the tenth. To be published by
Boydell and Brewer in England.
- 4 . *Old English Minor Poems* : Annotated bibliography of studies on minor Old
English poems, to be published in the series Boydell and Brewer Annotated

Bibliographies of Old and Middle English Literature

- 5 . *Old and Middle English Paleography* : to be published in the same series as no.4. Annotated Bibliographies of studies on medieval English vernacular manuscripts
- 6 . "A Fragmentary Cartulary from Combwelle Abbey" : an edition and commentary on the fragment of this cartulary preserved in Cambr. Univ. Library. To be published in *Archaeologia Cantiana* : publications of the Kent Historical and Archaeological Society.

Other Activities :

- 1 . Member of editorial board, *Mediaeval English Studies Newsletter* (published by the Centre for Mediaeval English Studies, Tokyo University)
- 2 . Consulting editor, *Journal of English Linguistics*.
- 3 . Between December 15 and January 15, travelled to England to read medieval English manuscripts in London, Oxford, and Cambridge

J.C. マーハ助教授

Conference Presentations

- 1 . March 29–31, 1989. British Association of Sociolinguistics. Leeds University. UK "Bilingualism and Minority Languages in Japan"
- 2 . May 13–14, 1989. Japanese Association of Applied Linguistics, Aoyama Gakuin University, "Story–Telling in the Family : A Discourse Analysis"
- 3 . May 24–25, 1989. Language Laboratory Association of Japan, Waseda University. Tokyo. "Husband–Wife Conversation : Taking a Closer Look"
- 4 . June 14, 1989. Japan Broadcasting Convention. Tokyu Hotel, Tokyo. "Japan as an International Society".
- 5 . July 29–30, 1989. Language Sciences Association of Japan, ICU, Tokyo. "Making Waves : Bilingualism in the Media".

Publications

BOOK (著書)

International Medical Communication. Edinburgh University Press. 1989. 176pp. Paper.

PAPERS (論文)

- 1 . "Language Use and Preference in Japanese Medical Communication." In *Working with Language : A Multidisciplinary Consideration of Language Use*

in Work Contexts. (Eds.). Joshua Fishman and Hywel Coleman. Berlin : Mouton de Gruyter. 1989 : 298–316.

- 2 . “Mastery Learning and Humanistic Approaches.” (with Brian Parkinson). In *Annual Review of Applied Linguistics*. (Ed.) Robert Kaplan. Cambridge : Cambridge University Press. 1989 : 127–139.
- 3 . Bilingual World. 国際化の新しい波・言語・メディア・日本, “J’s Note”, Special Issues, April. 1989. 東京 pp.24–27.
- 4 . (In Press) “Story—Telling in the Family : A Discourse Analysis” *Studies in Applied Linguistics* (Eds.) T. Shimaoka and Y. Yano. 1989.

Short Articles

- 1 . “バイリンガル番組”, 日本経済新聞 1989. 7. 21 pp.6.
- 2 . PASSO, September 1989. 『外国人教授が採点, 「いまどきの大学生」』 pp.47.
- 3 . 大学受験ラジオ講座 June. 1989. “国際化の新しい波・言語” pp.27.

Radio Broadcasting (ラジオ出演番組)

FM JAPAN J—WAVE. Mid—Afternoon Cafe. February—March. 1989.
 “Ethnic Radio.” FM JAPAN J—WAVE: A Discussion. August. 1989.

Television (テレビ出演番組)

NHK (Channel 3) 外国語としての日本語教育 ETV 8 February, 1989.
 FUJI Television フジテレビ “プレステージ” April, 1989.
 TOKYO Television テレビ東京 “ビジネス・ワールド” May, 1989.
 NHK (Channel 1) “アイヌ語弁論大会” June, 1989.

岩佐玲子研究員

研究活動

- 1 . 放送番組を中心としたマルチメディアラーニングパッケージの開発
 昭和63年度文部省委託研究「放送の他のメディアの最適組み合わせによる教材開発と効果の研究」に教材開発協力者として参加。教育テレビ番組「Hearing a Story ～Totto—chan」と組み合わせるメディア群の開発と報告書作成を分担。
- 2 . 外国語学習用 CAI の開発のための基礎的研究
 昭和63年度と平成元年度の2年に渡って文部省科学研究費の補助を受け, 奨励研究(A)「英文読解力向上をめざす語彙学習用 CAI の開発のための基礎的研究」を実施。
- 3 . 学校教育と教育機器との関係

鉛筆やノートをはじめとする文房具の普及が学校における教授・学習方法に与えてきた影響を踏まえて、視聴覚機器やコンピュータの出現が学校教育をどのように変えてきたかについての文献研究。

4. 高等教育（大学）における教授技術の評価に関する研究

学会発表・参加

1. 「教育テレビ番組“Hearing a Story ～Totto-chan”と組み合わせるメディア群の開発」（共同研究）『語学ラボラトリー学会 第28回全国研究大会研究発表要綱』 pp.43-46 昭和63年7月
2. 「教育放送番組を中心としたマルチメディア・ラニングパッケージの開発」『第33回放送教育学会・第25回日本視聴覚教育学会合同大会 研究発表論文集』 pp.43-44 昭和63年9月
3. 「英文読解力向上をめざす語彙学習用 CAI の開発のための基礎的研究(1)——大学生の英和辞書利用の実態と問題点——」『第14回 CAI 学会研究発表論文集』 pp.281-284 平成元年8月
4. 「FD 評価表と質問票をもとにした講義改善の試み」『日本教育工学回第5回大会 発表論文集』 平成元年10月

論文・著作

1. 「語彙力・読解力向上用 CAI による完全習得学習に関する開発研究——学習所要時間、辞書引き行動を中心に——」（共同研究）『日本視聴覚教育学会紀要 視聴覚教育研究』 第18号 pp.75-104 昭和63年3月
2. 「放送番組を中心にしたパッケージ教材の試み」（共同研究）『月刊 放送教育』 pp.44-49 昭和63年11月号
3. 「英文読解力向上をめざす語彙学習用 CAI の開発のための基礎的研究 1——大学生の英和辞書の利用と問題点——」『CAI 学会誌』 Vol.6, No.4 （投稿中）
4. “The Development of a Multi-Media Learning Package which Combines CD-ROM with Educational Television”（共同研究）*Educational Technology Research* Vol.13 Nos.1-2 （投稿中）
5. 「子どもの個性を引き出す道具としてのコンピュータ」『児童心理』（投稿中）

原 和子研究員見習

学会発表・参加

異文化間教育学会 第10回大会出席。1989年5月13日（土）・14日（日）於 京都外国語大学。

ロバート・ソロドウ研究員

研究活動 (research activities)

A study of Japanese participants in human potential seminars to determine the demographic and psychological characteristics of such participants, and the impact of their participation on their short term and long term adjustment.

学会発表・参加 (conference presentations & attendances)

Member of panel to discuss health care in the U.S. and Japan, organized by Asahi Shimbun, and published in their medical magazine "Midori".

論文・著作 (publications)

Chapter/article on "Stress Management" to be published in "Applied Psychology" Vol.13., Fukumura Publishing Co. "Medical Care & Health Psychology" is the title of Vol.13. Publication is in Japanese.

Monthly column in "TGA Eye" designed to help westerners in their adjustment to life in Japan.

その他 (others)

Training of staff and volunteers for Tokyo English Life Line.

塚本美恵子研究員

研究活動

1. 米国ゴルフ大学日本人研修生の適応と変化を1年半にわたって追跡調査中
2. 新しい環境への適応——転校生の場合——（小平記念会研究助成）調査のため、埼玉県入間市教育委員会及び市内6小学校に調査依頼し、転校生、担任教師、保護者への質問紙調査および面接調査を実施中

学会発表

1. 5月14日に京都外国語大学で開催された異文化間教育学会第10回大会において「米国ゴルフ大学日本人研修生の異文化体験による『対人関係価値』の変化」と題する発表を行った。
2. 6月16日に東京大学山上会館で行われた人類動態学会第24回大会において「新しい環境への適応——転校生の学校適応を考える——」と題する発表を行った。

論文

「帰国子女の適応過程——帰国年令・経過期間との関連についての母親の調査報告

一」 東京学芸大学海外子女教育センター紀要第5集

その他

1989年4月より駿河台大学法学部に非常勤講師として出講した。

「文化と人間」の会幹事

3. 大学院教育学研究科修士論文

1989年3月卒業者

A. 教育心理学

- | | |
|----------|---|
| 1. 井上 直子 | 人格の治療的变化過程の一理論 |
| 2. 北村 美香 | 対人情報処理における概念の想起しやすさの効果
—— 質問紙への大学生の回答分析 —— |
| 3. 美濃口 聡 | 対人恐怖についての一研究
—— セルフ・モニタリング概念を用いて —— |
| 4. 大井 直子 | 人生観に関する心理学的一研究
—— Kilby の価値尺度改訂版への試み —— |

B. 視聴覚教育法

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 5. 平形裕紀子 | 日本語教育のためのCAI語彙学習における音声付加の実証的研究 |
|----------|--------------------------------|

C. 英語教育法

- | | |
|-----------|---|
| 6. 謝 佳音 | A Study of Linguistic Geography in Taiwan : in Anticipation of a Historical Reconstruction of Proto-Taiwanese |
| 7. 小西 正恵 | Changes in Motivation for English Language Learning : A Series of Four Measurements |
| 8. 三宅 英文 | Conversational Effectiveness in Relation to the Learner's Proficiency Level of English in the Context of an Oral Interview : with Special Emphasis on Interlocutors' Compensatory Behaviors in a Japanese Setting |
| 9. 西村まさみ | English Communication Strategies used by Japanese ESL Students in Oral Discourse |
| 10. 上田 恒雄 | The Effect of Feedback on Interlanguage on the Use of Regular Past, Irregular Past, Plurals, Articles and Preposi- |

11. 渡邊 鉄太 tions
A Study of Goal Achieving Processes in Discourse :
Dialogues in Movies

1989年 6 月卒業者

A. 教育哲学

1. 新田ゆかり アメリカ合衆国の初等教育の保健教育
—— 教科書の記述内容を中心として ——

B. 教育心理学

2. 川戸さえ子 BECK DEPRESSION INVENTORY 日本語改訂版の妥当性の
研究

C. 視聴覚教育法

3. ネグレリ A Trial Development of a Programmed Instructional
キャサリン Material for the Learning of Chinese Characters in
Japanese Language Education
—— with Focus on the Sequencing of Radicals ——

4. 教育実習報告

1. 教育実習報告

1989年度には78名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1) 実習生総数 78名

男 子 15名
女 子 63名

2) 実習日程及び実習校

5月8日～5月20日 岩手県立黒沢尻北高校
5月15日～5月27日 埼玉大学教育学部附属中学校（埼玉）
5月16日～5月29日 筑波大学附属高等学校（東京）
5月20日～6月3日 秋田県立本荘高等学校
5月22日～6月2日 恵泉女学園中学校（東京）
5月29日～6月10日 竜王町立竜王中学校（山梨）、敬和学園高等学校（新
潟）、国際基督教大学高等学校（東京）、兵庫県立宝
塚高等学校、埼玉県立熊谷高等学校、山口県立徳山
高等学校

- 5月31日～6月13日 桜美林高等学校（東京）
- 6月1日～6月14日 広島女学院高等学校（広島）、群馬県立沼田女子高等学校
- 6月1日～6月16日 富山県立高岡高等学校
- 6月5日～6月17日 都立立川高等学校、都立国立高等学校、都立武蔵高等学校、都立東村山高等学校、杉並区立大宮中学校、文京区立第六中学校、中野区立北中野中学校、練馬区立開進第二中学校、目黒星美学園中学校、成蹊中・高等学校、日体桜華女子高等学校、女子聖学院、東京文化中・高等学校、頌栄女子学院中・高等学校、青山学院高等部（東京）、埼玉県立熊谷高等学校、秩父市立影森中学校、三芳町立藤久保中学校、聖望学園高等学校（埼玉）、伊勢原市立伊勢原中学校（神奈川）、福島県立喜多方高等学校、いわき市立勿来第一中学校（福島）、館林市立第一中学校（群馬）、名古屋市立工業高等学校（愛知）、鹿児島県立鶴丸高等学校、三重県立四日市高等学校、北海道立札幌北高等学校、京都府立福知山高等学校、茨城県立鉾田第一高等学校、山梨県立韭崎高等学校
- 6月5日～6月16日 金城学院高等学校（愛知）
- 6月5日～6月19日 雙葉中学校（東京）
- 6月4日～6月17日 三鷹市立第四中学校（東京）
- 6月6日～6月19日 愛媛県立今治西高等学校
- 6月6日～6月20日 二松学舎大学付属高等学校（東京）
- 6月7日～6月20日 宮城県立石巻高等学校
- 6月12日～6月24日 郡山市立守山中学校（福島）、中野区立第三中学校（東京）、聖ヨゼフ学園中学校（神奈川）、岡山県立岡山朝日高等学校
- 6月19日～7月1日 小林聖心女子学院中学校（兵庫）
- 9月4日～9月16日 新島学園高等学校（群馬）
- 9月18日～9月30日 静岡県立袋井高等学校
- 9月26日～10月9日 鳥取県立米子東高等学校
- 10月2日～10月17日 長野県立長野高等学校
- 10月9日～10月22日 広島三育学院中学校
- 11月6日～11月18日 新潟県立佐渡高等学校

3) 実習参加学生学科別内訳

学 科 性 別	男	女	計
人 文 学 科	0	5	5
社 会 学 科	2	5	7
理 学 科	3	1 0	1 3
語 学 科	0	2 2	2 2
教 育 学 科	4	1 6	2 0
教育学研究科	1	2	3
行政学研究科	0	1	1
比較文化研究科	0	2	2
理学研究科	1	0	1
聴 講 生	4	0	4
合 計	1 5	6 3	7 8

4) 実習生教科別内訳

学 科 性 別	男	女	計
社 会	3	5	8
理 科	5	6	1 1
数 学	1	4	5
英 語	6	4 8	5 4
宗 教	0	0	0
合 計	1 5	6 3	7 8

2. 教員免許状取得状況報告

1989年卒業生381名（学部349名、大学院32名）の内、一括申請により教員免許状を取得した学生は次のとおりである。

1) 教養学部学科別教免取得学生数（聴講生は除く）

学 科 性 別	取得者実数	中 一	高 二
人 文 学 科	7	5	7
社 会 学 科	10	9	10
理 学 科	7	7	7
語 学 科	17	13	17
教 育 学 科	11	10	11
合 計	52	44	52

2) 教養学部教科別教免取得学生数（聴講生は除く）

教 科 別 学 科	社 会		理 科		数 学		英 語		宗 教	
	中一	高二	中一	高二	中一	高二	中一	高二	中一	高二
人文科学科							5	6	1	1
社会科学科	5	6					4	4		
理 学 科			2	2	4	4	1	1		
語 学 科							13	17		
教育学科							10	11		

3) 大学院教免取得生数

研究科 専攻科 種 別		中 二	高 一	高 二
教育学研究科	教育哲学専攻			
	教育心理学専攻			
	英語教育専攻		1	
	視聴覚教育専攻			
行政学研究科	行政学専攻			
比較文化研究科	比較文化専攻			
理学研究科	基礎理学専攻			